

## 1.17/3.11 明日への建築 展

1.17/3.11 ARCHITECTURE FOR TOMORROW

---

関西・西日本の建築家が集結。

東北へ、そして明日へ、絆をつなぐメッセージを発信。

2011年3月11日、14時46分18秒、東日本大震災とそれにともなう大津波は、東北地方をはじめとする太平洋沿岸地域の多くの街や集落を一瞬にして消滅させてしまいました。あれから1年、国内外から被災地へ、緊急支援や復興支援の手がさしのべられ、被災地ではようやく長い復興の日々がはじまったところです。この震災から私たちが得た教訓は、人間と自然との関係を今一度問い直す必要があるということ、そしてこれからの時代へ向けた人間と自然の新しい関係を築いていかなければならないということです。そのために、建築や都市に何ができるかという問いを、明日に向けて投げかける必要があるのです。

日本人、そして世界中の人々が新たに心に刻むことになった「3.11」という記念の日に、日本の西側から東日本へ、そして世界へメッセージを発信します。16年前の1995年の「1.17」阪神淡路大震災を体験し、復興を遂げてきた関西圏、および西日本で活動する建築家たちに広く呼びかけ、被災地の復興を祈念すると共に、明日へ向けて人間が自然とより調和した世界を築いていくために語り合う場を設けたいと思います。

『1.17/3.11明日への建築 展』実行委員会

## 1.17/3.11 明日への建築 展

1.17/3.11 ARCHITECTURE FOR TOMORROW

---

## 概要

1. タイトル 「1.17/3.11 明日への建築」
2. 展示会 「1.17/3.11 明日への建築」展  
会場：ASJ UMEDA CELL（梅田阪急ビルオフィスタワー24F）  
会期：2012年2月18日～3月12日（24日間）  
  
記念シンポジウム 「再生・環境保全時代の建築」  
日程：2012年3月3日（土）13:00～17:00  
会場：大阪国際会議場（中之島グランキューブ）イベントホールA  
基調講演： フランチェスコ・ダルコ（建築史家、CASABELLA編集長）  
出演建築家によるシンポジウム  
終了後、リッツカールトンホテル大阪にて懇親会（会費制）  
  
「3.11から明日への都市」  
日程：2012年3月11日（日）14:00～17:00  
会場：IMPホール（大阪ビジネスパーク）  
第一部 展示会と演劇の解説  
失われた街 ギャラリーリーディング  
第二部 基調講演 上谷広二（京都大学教授）  
ラウンドテーブル 高松伸、岸和郎、遠藤秀平、木村博昭、上谷広二  
第三部 池宮正信（ピアニスト）復興チャリティ演奏
3. 主催 「1.17/3.11 明日への建築」実行委員会  
顧問：高松伸、  
委員：梅林克、河井敏明、槻橋修、畑友洋
4. 企画 監修：高松伸（建築家・京都大学教授）  
企画：槻橋修（建築家・神戸大学准教授）  
アドバイザー：梅林克（建築家、F.O.B. Architects主宰）  
会場構成：畑友洋（建築家、畑友洋建築設計事務所主宰）
5. 協賛 アーキテクツ・スタジオ・ジャパン株式会社
6. 後援 毎日新聞社  
モンドドーリ出版社  
アーキエイド
7. 協力 「失われた街」模型復元プロジェクト実行委員会  
日本スペースイメージング株式会社

## 展示内容

## 1.17/3.11 ARCHITECTURE FOR TOMORROW

## 「失われた街 3.11 のための鎮魂の復元模型」

## LOST HOMES : The Requiem for 3.11, 14 Reconstruction Models

TOTO ギャラリーにて2011/11/2~12/24に開催された展覧会『311 失われた街 展』にて主要な展示物として出品された、14の被災地域を1/500の白い模型で再現した復元展示。美しい精巧な白模型とすることで、模型を覗き込んだときに、一瞬にして失われた日常風景が見るものの記憶の風景と重なり合う。模型はすべて学生のボランティアによって制作された。



## 明日への建築 30

関西・西日本を拠点としている建築家30名(予定)に、1.17を身近に体験し、そして現在3.11後の世界を切りひらいていく存在として、いかなる明日を思い描いているか。明日の社会へのメッセージを込めた作品展示を行う。各々プロジェクトの模型とパネルにより展示する。

## 1.17の記録：「希望新聞」

1995年1月17日、阪神・淡路大震災が関西を襲った当時、新聞各社は被災の中心地が必要とする情報を連日、重点的に掲載した。中でも毎日新聞が翌日からはじめた「希望新聞」は、復興の最初期におけるメディアの役割を生々しく伝える。震災後数週間の同新聞のオリジナルと共に閲覧展示する。

## 阪神・淡路大震災＋クリエイティブ/タイムライン・マッピングプロジェクト

クリエイティブ・デザインセンター神戸の準備室「KIITO」が3.11後より開始した研究プロジェクト。阪神・淡路大震災からの復興の16年間に、デザインやアート、建築といったクリエイティブな取り組みは、いつ、どのように行われてきたか。16年間のタイムラインの中にプロットしていくことで、東日本大震災においては始まっている復興活動にとって、参照となるような知見を構築する。

1.17/3.11 明日への建築 展  
1.17/3.11 ARCHITECTURE FOR TOMORROW

参考資料①

「失われた街 3.11 のための鎮魂の復元模型」

LOST HOMES : The Requiem for 3.11, 14 Reconstruction Models

2011年11月2日～12月24日までTOTOギャラリー・間で開催され話題を呼んだ展覧会「311 失われた街」展で制作・出品された14の被災地の復元模型を再編集し、会場内特設ブースにて展示を行います。

\*放映：NHK ニュース WATCH 9 (2011. 11.02)

毎日新聞 2011年12月12日 東京夕刊

ALL ABOUT JAPAN 2011年11月8日 WEB マガジン



ギャラリー間での展示風景 (左・右) photo: nacasa&partners



釜石詳細 (左)、田老 (右)

「失われた街 ギャラリー・リーディング」 (演劇作品・約15分間)  
LOST HOMES -gallery reading-

「失われた街」プロジェクトという名の下に、全国の建築学生に呼び掛け、津波で失われてしまった街や集落を模型で復元する。このプロジェクトは、今回の震災で失われた街や集落を復元模型を通して体感し、一瞬で失われてしまった無数の街角、無数の情景を悼み、弔うことを通してこそ、次の復興へ向けてみんなが一丸となれるのだと思います。

演劇作品「失われた街 ギャラリー・リーディング」は、この取り組みの過程で行われた住民ワークショップから生まれたものです。学生が制作した白い模型を囲んで住民が様々な記憶を語ります。記憶でいっぱいになった模型から、ひとつひとつの思い出を紡いでいくように、静かに朗読が行われます。無くなったはずの街が甦るように、それぞれの模型は思い出の語りによってざわめきはじめます。

本作品は芸術作品であると同時に、生きた記憶を次世代をになう子供たちに伝えていくために、「津波と共に生きる文化」を正しく継承していくための教育的プログラムとなっていくことを目指しています。

「失われた街 ギャラリー・リーディング」

演出：高尾隆 (演出家・東京学芸大学准教授)

出演：荒木秀智 (俳優)、古賀彰吾 (俳優)、保倉りえ (俳優)、本木幸世 (俳優/劇団黒テント所属)

即興演奏：Kevin McHugh (ピアニスト)

制作：砂川史織 (プロデューサー)

企画協力：高宮知数 (プロデューサー/座・高円寺劇場創造アカデミー講師)

企画：槻橋修 (建築家・神戸大学准教授)

協力：座・高円寺劇場創造アカデミー、神戸大学槻橋修研究室、横浜市立大学鈴木伸治研究室、萬田隆+武庫川女子大学有志、BankART1929

初演：2011年10月14日 「新・港村」にて初演



(参考)

展覧会をご覧になった方からの感想

「311 失われた街」展(TOTO ギャラリー間、11/2~12/24)

東京での復元模型展が終了した 12 月 25 日、展覧会をご覧になった浪江町出身の方から感想のメールを頂戴しました。本展で制作された 14 の都市の復元模型のうち、福島県浪江町だけは津波の被害ではなく、福島第一原発事故による半径 20 km 圏内の避難命令によって、生きながらにして失われてしまった街を再現しているものです。

会場での解説文

福島県の太平洋側、浜通り地方の中央に位置する町・浪江は地震と津波の被害で死亡者 146 名、行方不明者 38 名を出したが、それに加えて福島第一原発事故による町全体への影響は計り知れない。事故にともない町は半径 20km 圏内の「警戒区域」と圏外の「計画的避難区域」に指定され、ほぼすべての住民約 2 万 1 千人が避難した。「警戒区域」には平成 23 年 4 月 22 日以降、立ち入りが制限されている。町役場も 5 月に二本松市に臨時移転し、町は土地を失った状態になっている。

(以下、ご本人の許諾を得てメールを転載します。)

「失われた街」Web サイトから、  
お問合せを受け付けました。

2011 年 12 月 25 日

◎ お名前：原田洋二

◎ E-mail：

● 内容：

初めてメールします。

24 日、このプロジェクトを拝観させていただきました。感動しました。

私は、福島県浪江町出身で、このたびの震災で親、兄弟は無事でしたが、会津若松、東京、京都へとバラバラに避難しました。これまで一時帰宅で浪江町には 3 度入りました。町内は津波の被害はありませんが、放射能でがれきが放置され、いつ行っても気持は荒んでしまいます。

この展示で浪江町があったので驚きました。私の自宅もありました。知人、友人の家もありました。

視線を模型の中の通りまで下げて顔を近づけて見ると、まるで町の中に入ったような錯覚を覚え、思い出が次々と蘇ってきました。とても不思議な感覚で、涙がポロポロこぼれてきました。

この展覧会を避難している兄に話したら、「その展覧会こそ、避難者が見たいだろう」と言っていました。

兄の気持ちはわかります。そこで伺いたいことがあります。

この展覧会は巡回の予定はありますか。できましたら、被災地を回っていただきたいと思います。また、模型はどうなるのでしょうか。各自治体などにご寄付されるというのはいかがでしょうか。

誠に勝手なお願いですが、本展の意義は確実に展覧者に届きました。

ありがとうございました。

ASJ10周年記念 『1. 17 / 3. 11 明日への建築展』

ご協賛のお願い

登録建築家様各位

平素は格別なる御愛顧を賜り心より御礼申し上げます。

ASJ も活動を開始してお陰様で10年目を迎えることができました。ひとえに皆様方のご支援の賜物と心より御礼申し上げます。ASJ では10周年に合わせて年間通して様々なイベントを計画しております。

その第一弾としまして、東日本大震災での復興祈願を目的として別添しております『1. 17 / 3. 11 明日への建築展』を2月18日より3月12日まで建築家情報空間 UMEDA CELL にて3週間強開催いたします。後援には、モンドドーリ出版社 (CASABELLA JAPAN) と毎日新聞社が決定しており、TOTO ギャラリー・間に展示されておりました「失われた街」の模型が UMEDA CELL に巡回展示されます。開催期間中には3月3日と3月11日にシンポジウムが開催され、CASABELLA の編集長フランチェスコ・ダルコ氏も来日し講演予定です。

つきましては、今回の復興祈願イベントにご協賛頂きたく深くお願い申し上げる次第です。

ASJ ではこれまでの法人契約先700万世帯に加えこの1月にクレディ・セゾン (カード発行残高2800万枚) との提携を決定し、本格的な会員募集を開始いたします。2012年度は1万件の新規会員登録を見込んでおり、登録の皆様にはできるだけ多くの方に参加頂けるよう心掛けてまいる所存です。又 CASABELLA JAPAN に関しましても、一部不足によりお届けできていない時期がございましたが、2012年度は増刷によりご登録の建築家の皆様には全員送付するよう計画しております。

皆様方のご理解を賜りたく何卒宜しくお願い申し上げます。

アーキテクト・スタジオ・ジャパン(株)  
代表取締役社長 丸山雄平